

資料涉猟余話

その100

先日、飯田の骨重者に連絡を入れると市を素見した折にみた井出嘉汕のダルマの短冊が数日来気にかかってしょうがない。ダルマや井出嘉汕に興味があるわけではないので、なぜだろかと考えていると、あの短冊のダルマに添えられた画費がひっかかっていることに思い至った。

「売ってしまったらしょうがないが」と、駄目元で業

る。思いの外、精緻なダルマであることに改めて嘉汕の絵描きとしての技量を再認識した。

が、問題は画費である。字は「覺」の篆書である。小篆と尾林焼に篆書を彫り込む意匠を加えた篆

井出嘉汕のダルマ

嶋 不濁

金文を混じえたような独特のデザイン。「浩堂」の署名と落款があった。右上が



映(明治45年)に享年15歳の時に上京、高正4年9月には47歳で亡くなっている。一方、井出嘉汕(吞佛)は、明治7



篆刻・日本画・彫刻などで自ら一家をなした。吞佛の号は釈宗演より授けられた。名人肌で好んで描いたダルマは神韻漂うものがあるとの評がある。この二人が飯田で同じ空気を吸っていたとしても、それは5年にも満たない。

しかし類は友を呼ぶというか、彼らは確実に出会っていたのだ。そういえば、以前調べていた、仏像や観音様を手びねり、ヘラ一つでつくった西澤南海という陶芸家を紹介した新



聞記事に「四歳の男の子を背負い込み飯田町に井出吞佛君を訪ねた。苦境を察した吞佛が龍江村の浩堂や秋元匄斎に添え書きをもたせた」

「南信」大正10年6月7日)とあり、井出嘉汕が龍江村にいた大橋浩堂に紹介状